

Title	明治少年節用・少女節用
Sub Title	Meiji shonen setsuyo, shojo setsuyo
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.36- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0036">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0036</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明治少年節用・少女節用

関 場 武

本稿は、本来有している辞彙・辞典的な機能を上げ、事彙・事典的になって行った一群の節用集の流れを辿る作業の一環として、江戸と明治にかけて編纂・刊行された児童向けの節用類を取りあげ、紹介と考察を行なったものである。なお、「明治少年節用」として「三色旗」四八五号(昭63・8)に寄せた拙稿と一部重複する個所があることをお断りしておく。それにしても、拙稿の構想をお話した時、西村さんが、子供の頃、「少女節用」というのが家にあつて覗いて見たことがあるけれど、君の言うそれとはちがうとおっしゃったが、それは何であつたのであろうか。残念乍ら未詳である。勿論、今回取り上げたものが全てというわけではないので、今後の調査に俟たねばならないのであるが……。

## 一 明治少年節用

明治期の出版ジャーナリズムを考える上で忘れることのできない出版社の一つに、博文館がある。同社は、明治二十年(一八八七)年六月十五日、時に数えて五十三歳であつた越後長岡出身の大橋佐平によって、東京本郷弓町二丁目の六

疊二た間の借家に創設された（「博文館小史」）。同社の最初の刊行物は「日本大家論集」という既刊の各種専門雑誌の主要記事を抄録したもので、一冊十銭という廉価も手伝って忽ち一万部余りを売尽すという大当りを取った（坪谷善四郎「大橋佐平翁傳」）。そのためすぐに店が狭隘となり、同月の末に日本橋区本石三丁目、さらに二十五年には同本町三丁目へと社屋を遷し、長男新太郎らの経営のもと、とりわけ明治二十年代から四十年代にかけて、雑誌に叢書物に啓蒙雑著にと、その盛業ぶりを誇ったのである。例えば小波のお伽噺・昔噺シリーズは皆博文館より刊行されたものであるし、雑誌「太陽」「少年世界」「文藝俱樂部」、帝國文庫、日本歌學全書、近古文藝温知叢書、日本文學全書、それに佐々木信綱の「歌の栞」、大和田建樹の「謡曲通解」等々、思い浮ぶままに幾つもあげて行くことができる。筆者が興味を有っている辞書類にしても、石川鴻齋の「篆文日本大玉篇」「新撰日本字典」、山田美妙の「萬國人名辭書」等、二十点近くを数えるのである。

さて、その博文館の夥しい出版物の中に、「明治少年節用」と題する、三六判（『新書判』六百二十六頁の少年向け啓蒙百科がある。同書は明治三十六年十一月十五日印刷、同十八日の発行。但し国会図書館に献納された本によると、印刷日の「十五日」の「五」を消して墨筆で「八」と訂し、発行日の「十八日」の「十」を「廿」に、「八」を消して「一」にし、「大橋」の小判形朱印を捺してあるから、実際の印刷と発行は各々十一月十八日と廿一日だったのである。奥付は単枠内に界線を置いて上方に「少年雜誌界之大王」少年世界」の広告を出し、下方飾り枠内に刊記を載せる。刊記は右方

巖谷小波  
木村小舟  
合編  
明治少年節用全  
東京 博文館藏版

に前述の印刷・発行年月日を二行に分けて記し、その下に「定價金七拾五錢」の価格表示、左方に

編輯者 少年世界編輯部／發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎／印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地  
青木弘／印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式秀英舎第一工場／發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

とある。(七版本は印刷者 吉見繁蔵、印刷所 博文館印刷所)。管見に入った初版本は改装なので、装幀は明治三十九年五月の七版本によって紹介する。表紙は濃黄緑色クロス装、裾に金で梅花模様を押す。背文字は金、書名のみ記載。堅一七・八、横一〇・五糶。小口は三方とも紅色に染め、扉は紺地に白ヌキで編者・書名・版元を記す。編者は、図版に見るように、扉では巖谷小波・武田櫻桃・木村小舟の三名。奥付では少年世界編輯部の編となつてゐるが、小波は勿論、他の二名も、当時博文館の編集記者として小波を輔けていた硯友社系の文学者であるから、齟齬は無い。

はじめに皇太子・皇孫肖像写真一葉、各国々旗・海軍高等武官服装・陸軍高等武官服装等の色刷り口絵と公爵二條基弘の題字。次いで

凡そ兒童の教育ほど困難なるものはあらじ、十分なることを云へば、兒童の父母たる者は、兒童の生理心理の大躰を知るにあらざれば、到底十分なる家庭教育は出来ぬなり、(中略)然るに獨り巖谷季雄君はこゝに見る所ありて、夙に兒童の教育に心思を勞し、能く兒童の性情を研究し、所謂御伽噺主義なる書、其他凡て兒童に必要な書を數多編著せられしが、是れ全く君の天才に加ふるに、更に經驗を以てしたるが爲めにして、兒童教育上少からざる裨益を與へられたるものといふべし。君はこたび又二三の学友と共に、高等小学乃至中学下級生徒等の教科書以外に於ける学習の便を図り、明治少年節用なる書を編著せられしが、此書は従来の節用とは大に異りて、少年に今日の新知識を與ふる上に於て、其効果頗る多大なるを疑はず、余は君が少年の教育に意を用ふることの、甚だ深切なる



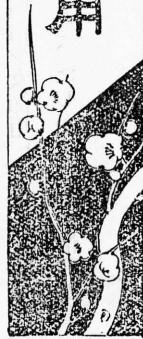
を謝せずんばあらざるなり。

という文学博士、男爵加藤弘之の明治三十六年十月付の「はしがき」二頁分と、

近年我邦少年文学の勃興は、實に著しい勢である。童男童女に對する讀物の、日に月に發行されるのは、また壯なる有様では無いか。然し乍ら、翻つて之を觀るに、その讀物の多くは、娯樂笑の用に供するもので、所謂の「少年節用」と成り、修学の参考とも成る可き書籍は、未だ割合に少いのである。茲に生等の浅学を顧みず、この「明治少年節用」を編纂するもの、蓋しその缺所を補はうと云ふ、微衷の他は無いのである。元來「節用」なる者は、西洋に所謂の「レキシコン」、若くは「エンサイクロペヂヤ」の類であるが、今この書を編むに當つて、その後者の



# 明治少年節用



## 日本歴史

日本と云う國は、亞細亞洲の中でも、一番東の方にある島國で、毎朝出る日が、この國の方から上ると云う

## 本科

### 天文科

天文學と云ふのは、太陽、月、星、地球と云つたやうな天體を知る學問で、太陽とはどんなものであるか、月の世界とはどんなものであるか、地球とはどんな形のものであるかと云ふ事を究めるので、その中にはま

日本歴史

天文科

ふ。(後略)  
云々という明治三十六年天長節の日付の編者の「緒言」三頁分(七版本は紫色刷)がある。そのウラには時の太鼓に鶏の番と雛二羽の絵。続いて明治二十三年十月三十日付の勅語(紫色刷、七版本は深紅色刷)や皇室一覽、皇

族一覽、天皇御歴代が合せて十六頁。さらに目次が十八頁分あって、本文に入る。本文は上方に鼈頭欄があるタテ二段組五百五十頁分。末に「和漢洋對照年表」十七頁分があり、次に「明治三十七年日曜大祭祀日表」一頁分を付す。なお、奥付の次に「少年讀本」や小波の「日本お伽噺」「日本昔噺」、<sup>傳家</sup>「寶典明治節用大全」第八版、明治三十七年度用当日記・懷中日記等の広告、全二十一頁分がある。因に明治三十九年の七版本は、口絵に『三十八年式軍服及肩章』の図が入り、緒言ウの図が地球儀とトンボに替り、和漢洋對照年表の末にあった明治三十七年の大祭祀日表が削られ、軍旗を持った兵士のカットになり、広告が十三頁分と少なくなっている等の異同がある。

さて、本文の内容であるが、後述の「明治少女節用」巻末の広告で、本書の内容を紹介して、「日本少年座右の寶典とは即ちこの書の謂也」と宣伝しているように、たしかに色々な情報が載っている。全体は「本科」と「別科」に分かれ、本科は更に

天文、地文、地理、物理、化学、動物、植物、鑛物、工業、農業、商業、数学、音楽、遊戯、體操、軍事、国文、漢文、英語、作文、和歌、俳諧

の二十二科に分かれる。そして例えば

星とは夜になると、ぴか／＼大空に光つて居る金米糖のやうなものばかりを云ふのでは決してない。天文学の上から云ふと、太陽も、月も、地球もまた星と呼ばれるので、此星を大きく區別して見ると、恒星、遊星、月、彗星、流星の五種になる。(天文科―5)

遊戯は先づ身軀を丈夫にし、心持を爽快ならしめ、品性を高尚にするもので、随つて遊戯は體育にもなれば、修身の實習にもなるのである。(遊戯科―1)

等といった説明をしているものである。右の例からも窺われるように、その内容水準は決して高くない。なお、口絵に軍旗や軍服が出、本文に軍事科があるが、太平洋戦争時に於けるそれに比べれば、遙におとなしいものである。出版元の博文館は、日清・日露戦役に際し各々實記や「日露戦争寫真畫報」を出して当て、率先して国に贖金をしているが、残念乍ら当時はそういう時代であった。

また、別科は、大祭祀日略解、少年吟誦用詩歌、室内遊戯に始まり

日本事物起原（日本の稱々小説）、泰西事物始原（日月蝕と天幕）、影畫法、秘傳五十題（赤切を治する法）封じゴム製法、寫真術、福引き百題、少年年中行事、考へ物、鳥類飼育法、昆蟲採集法、世界國勢一斑

等を経て、遊学の栞、学校一覽、和漢数字盡に終る二十七種の、実用知識・日用便覧を収めている。そのうち、9「福引き百題」の九十番に、「明治少年節用」と題を出して、「薪一束批把梨Ⅱならびはなし」と種明かしをし、11「考へ物」の二十一と二十三で、「明治少年節用集はほん」とに。（徳川家の二忠臣）「明治少年節用集程面白い書物は他に。（植物の名三）」という問いを仕かけ、「いゝ本だ（伊井本多）」「比びはなし（檜杔杷梨）」という答えを用意する等の、お遊びも混じえている。

一方、頭書欄に当る「鼈頭」は、日本歴史、日本お伽噺（桃太郎の話）天の岩戸の話 二十五話、イソツブ物語（お伽三十六佳選、鴉と白鳥の子供と蛙）、世界歴史、支那歴史、東西立志談の六種を収載する。そのうちの日本お伽噺・イソツブ等は、明治二十四年一月、博文館の少年文学叢書第一編に「こがね丸」を発表し、二十八年以降は、同社刊行の児童向け雑誌「少年世界」の主筆として活躍したほか、「少女世界」や「幼年世界」も主宰。かたわら、日本お伽噺

や日本昔噺、明治お伽噺、世界お伽噺、世界お伽文庫といった膨大なシリーズを続々と企画・出版して、明治の、と言うより近代日本の児童文学界に大きな足跡を遺した巖谷小波の著作類と比較し、この部分が彼自身の手になったものかどうか等を検討する必要がある。また、緒言で

鼈頭の諸篇は、小波が少年文学に對する、一家の假名遣法を用いたのである。

と言っているように、本科と別科はいわゆる歴史的假名遣を採って記述されているが、この鼈頭は

其時わもう夜で、しかも雨がザア／＼降つて居ましたが、やがて羅生門の前まで來ますと、案の定鬼が出て來て、いきなり綱の頭をつかみ、上え引きあげようとなりました。(日本お伽噺15「羅生門の話」)

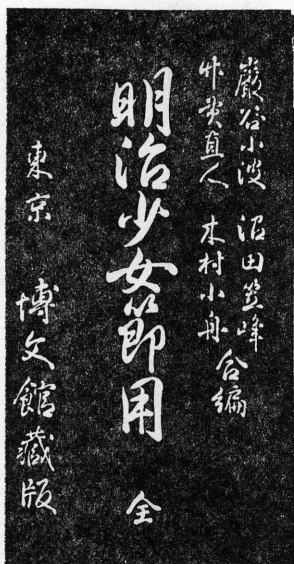
といった具合に、当時色々と議論があつた假名遣論の中で、小波が提唱した彼一流の假名表記法に拠っているのが、特色の一つでもある。

## 二 明治少女節用・家庭節用

江戸に続く明治の教育は、男子と女子とを截然と区別するところにあつた。男の兒向けの「明治少年節用」が出た約四年後、明治三十九年九月創刊の雑誌「少女世界」が順調に部数を伸ばしたのを機に、博文館は「明治少女節用」を刊行する。同書は明治四十二(一九〇七)年八月の刊。次に引く「緒言」(明治四十年中元 編者識)の一節からもわかるように、装幀・内容とも明らかに「明治少年節用」を意識している。すなわち緒言に言う。

少年の爲めに『少年世界』あり、少女の爲めに『少女世界』のある以上、曩に出版した『少年節用』に對して、茲に『少女節用』の出づるのは、元より然るべき事と信ずる。此故に、客年九月、少女世界創刊の當時、已に其編輯部員は、本書編纂の計畫を立て、爾來約十ヶ月を経て、漸く完成を告ぐるに至つた。若し夫れ編輯の順序、製本の體裁に至つては、一切少年節用に準じて居る。畢竟、『少年』を兄とすれば、『少女』はその妹である。而も両々相俟つて、我が少年、少女諸君の爲めに、幾分でも校外の師友たる實を挙げ得るならば、編者の満足此上も無い。

云々と。つまりここで、少年節用と對になるものとして本書が編纂されたことをはつきりと語つてゐるのである。その少女節用の判型は少年節用と同じ三六判。竪一七・九、横一〇・八糎。表紙は空色クロス装、裾に金で撫子模様。背文字も金、書名のみ。但し少年節用が篆隸体であるのに対して、女らしさといふことで行草体になつてゐる。これは扉も内題も同じである(図版参照)。小口は少年節用と同じく紅色染め、扉も同じく紺地に白ヌキで編者・書名・蔵版元を記す。編者名は扉は号で、奥付は本名で出す。即ち小波巖谷季雄と笠峰沼田藤次、竹貫直人、小舟木村定次郎の四名。奥



付は単枠内上部に右横書きで明治四十年八月八日印刷／明治四十年八月十五日發行と記し、その下方を枠で囲つて、右方に「明治少女節用奥付 定價金八拾五錢」と記し、界線を置いて左に四名の編者を列記。發行者は少年節用と同じく大橋新太郎。印刷者は、東京市小石川區久堅町百八番地の市川七作。枠外下方には「博文館印刷所印行」とある。そして更に界線を置いて左に「發兌元 東京市日本橋區本町 博文館」の名を出す。

# 明治少女の團



## 少女立志談

日本 部

## 本科

少女心得

▲神功皇后  
我が邦わ、昔からえらい婦人が澤山あります。今その人々の話を、此所で紹介しようとするに當つて、まづ第一番に擧げな

少女立志談

少女心得

少女と愛情 女子が生れ落つるとから、死ぬまで、一日も缺いてはならぬものは、やさしい愛情であります。愛は女子の生命と言はれる位で、いかに學問があり、技藝がよく出来ましても、もし愛情が足りなかつたならば、一生涯非常に不幸な目にあはなければなり

さて、内容は、はじめに皇太子妃殿下以下、の皇族の写真と、下田歌子・棚橋絢子・鍋島栄子・山脇房子・三輪田真佐子の「女流五名家」の肖像写真、合せて二葉。色刷り口絵は、服装の変遷・髪のかき方・少女用具・旗と勲章・各国々旗、都合六葉。それに公爵夫人鍋島栄子と学習院女学部長下田歌子の題詠二葉を付けて権威づけを図り、次いで青色刷りで

よそ少女の日常心がくべきことを始めとして、立志談、歴史、地理、趣味、ゆたかなるお伽噺、文学、博物、理化、数学、家事、技藝、衛生、娯楽に至るまで、あらゆる事項を網羅し、而も少女の修学に、最も適合するやうに記されてあります。げに、少女節用の名にそむかぬものと申さねばなりません。想ふにこの書は、学校にあると家庭にあるとを問はず、わかき少女等が常に座右に備へて、もの学びわざ習ふ師友としましたならば、これを繙くものゝ享ける幸福の多大なのは言はずもあれ、わが女子教育界に及ぼす効果も、決して尠少ではあるまいと存じます(後略)。

という山脇房子高等女子実修学校長の明治四十年七月付の「序」二頁分と、前引の「緒言」二頁分がある。次いで勅語

(朱刷り)、皇室一覽、皇族一覽が合せて十八頁。さらに目次が十三頁分。本文部分は鼈頭欄付きタテ二段五百九十八頁。末に「内外對照年表」六頁分を付す。奥付のウラからは「明治少年節用」増補訂正八版、少女文庫、「増訂日本女禮式大全」等の広告十一頁分がある。

本文は「本科」と「別科」に分かれ、本科の方では

\*少女心得、日本歴史、西洋歴史、日本地理、世界地理、少女文学、作文法、植物、動物、礦物、算術、物理学、化学、音楽、地文、天文、禮法、體操遊戲、裁縫、編物、刺繡、造花、料理法、衛生、家政、茶の湯、生花、書畫、英語、農業、軍事

の三十一の目を立てる。\*印を付したものは少年節用に無いもので、少女心得、禮法以下茶の湯に至る各科に、女子のための修養を謳う本書の編纂意図が明確に出ている。内容は、たとえば

行進遊戲 此遊戲は殊に諸嬢に適當した體育法で、頗る優美なものであります。規則正しく、しとやかに、揃つて行ふのが此遊戲の本旨なのです。決してお傳婆をなすつてはいけません。(體操遊戲—9)  
家庭の團樂 といふことを、よく人が言ひますが、皆さんも今の中から、つとめて好機嫌を以て、家庭の樂しみを増進するやうに、快活に平和に振舞はなければなりません。皆さんのやうな幼少な頃から、かやうな習慣をつけておきますと、將來主婦となつて、一家を治める時に、大そう都合がよいのであります。(家政—10)

のような具合で、少年節用に比して一段と実用性・教訓性が増している。因にこの面を強調して行くと、明治四十三(一九一〇)年八月、東京市青山穩田にあつた女子裁縫高等学院編刊の「家庭節用」に行きつく。同書は

# 家庭節用

女子裁縫高等學院編纂

## 家庭と婦人

### 家庭の趣味

家庭には理想、又は窮乏、すべて用字は不用なればなり。安らかにたひらなるべく、女子が家庭を静ましくするには、その心掛として、常に用意こまやかに物事に慣れぬべからざるは、是れ婦人の教へなり。

### 家庭と身體

仰いで天を見、俯して地を見れば、造化の妙實に玉り遊して、彼の露々として茂る林は、恰も上帝の樂園の如く、沁みたる流水は、神女の琴瑟の如く、飄

家庭と婦人

飄たる松聲にも餘情あり、春は香ばしき種々の花を採集し有用に供せられ、夏は勤よべき緑陰、樹すべし清泉を興へ、仲秋の懸鐘として無限の想を懐しむる時も、尚ほ思ひ或は製しましむるに皎々たる符月を以てす、冬は雪の心をかくわれと云はねばかりに、皎々たる白雪を以て紅塵を消し、是れ實に宇宙が吾人に與へたる情懷にあらずとせんや、而して吾人の棲息せる世界の隅々に行けば、米園には立派なる商家、或は工場が建てられ、印度には古き精麗なる寺院あり、歐洲には至る所壯麗なる宮殿あり、官邸あり日本にも日光の如き、奈良の如き、入目を眩せしむるに足るべき建築物あり、これを遊れる人にして、

弊校が本科として又科外として教授する所の、所謂家庭科ともいふべきものゝ大要

であつて(序)、菊判一冊、十五行タテ二段組一九〇頁。

家庭と婦人、女禮式、西洋禮法、産前産後、育児法、家庭衛生、病人看護、和服裁方、和洋端物裁断法、手紙の認め方、日本料理、支那料理、西洋料理、生花の心得、茶之湯心得、家庭雑事

の十六の科目に分けて、実用知識を授ける。

また、少女節用に詠草や序を寄せている下田歌子(実

踐女学校校長)・山脇房子(山脇高等女学校校長)らが編集顧問に名を列ねている婦人文庫刊行会から、「節用」と題する巻が二冊出ている。例えば大正三(一九一四)年六月に婦人文庫の第三巻として出た分は、四六判一冊、四四八頁。

近頃女子教育の缺點として世間に唱へらるゝは、女学校出身者が、實用向の智識に乏しといふ事なり(中略)此の巻はこゝに意を用ひ、専ら学校教育を補ひて、直に家庭日常の用に應じ得る座右の参考書たらしめんとした……

と嘉悦孝子(日本女子商業学校学監)がその序文で述べているように、実生活に役立つ知識を供することを目的としたもので、「女学範」、「和漢筆道手習指南」、「都風俗化粧傳」、「當流料理大全」、「四季漬物早指南」など、江戸時代に著述・



刊行された女性向け教訓書・実用書七点を翻刻・収載している。

なお、少女節用は少年節用に比べ、記述が整理され前進している面もうかがえる。また別科では、少女年中行事、植物採集に始まり、秘傳(皮膚の色を白くする法、聲を美しくする法)、化粧品、衣服の心得、遊学の栞、皇族のお邸等、二十一種の日用便覧を掲載している。少年節用の如く福引等に便乗しての自己宣伝はしていないものの、14「讀書案内」四「少女の讀むべき書物」では

少女に必要な學問や技藝は、この『明治少女節用』

の中に、大ていは集め記してありますが、なほこの外に、讀むべき書物が澤山あります。

節用集 伊

乾雷公雷電 霹靂 稲光 稻妻 夷則 巖倉 稻荷 伊羅胡崎 五百川 石上 嚴島 石清水 妙美井 射場的 石橋 碓氷 板橋 石近 瑞籬 温泉 板敷 狗防 一口 巖窟 巖窟 通作 池 沙碓 碓 泉 愁家 宅舍 屋 菴 廬 菟 屋棟

易林本・卷頭

として、三輪田真佐子「新家庭訓」(博文館)、下田歌子「婦女家庭訓」(同)、坪内水哉「女禮式大全」(同)等、十点のうち八点までを博文館発行のものの中からあげて宣伝している。鼈頭は、少女立志談(〈日本の部〉神功皇后、山城の幼女20名、〈外国の部〉ジョアン、ダアク(佛國)ナイチンゲール(英)13名)、少女お伽噺(かくや姫)手無し娘23話)、格言三十題、和歌三十首、笑話、考へ物、謎々、吉凶占ひ、子守歌、羽子突歌、手鞠歌、天氣豫知法の十二種で、少女立志談、少女お伽噺の仮名

遣は、少年節用と同じく小波流に拠っている。

### 三 節 用 集

さて、以上四点の書物の表題に採られている「節用」という語であるが、これは、文安元(一四四四)年成立の「下学集」以後、室町時代中期の文明から明応三(一四六九—一九四)にかけて成ったイロハ分け兼部門別けの辞書「節用集」に由来する。而してその節用集の「節用」とは、例えば延宝九(一六八二)年五月江戸新板の「増補頭書<sup>両點</sup>二行節用集」で

按ずるに此二字、論語より出たる字なり、論語<sup>ガクジヘンニカ</sup>学而篇<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、道<sup>ニ</sup>千乘<sup>ノ</sup>之<sup>ク</sup>国<sup>ニ</sup>、敬<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>信<sup>ス</sup>、節<sup>シ</sup>用<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>愛<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>、此<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>用<sup>ノ</sup>の<sup>二</sup>字<sup>一</sup>を<sup>ト</sup>りて<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>の<sup>二</sup>題<sup>一</sup>号<sup>ト</sup>とせり、節はほどよくする儀、用は財用<sup>ノ</sup>の儀也

とその出典を指摘し

あまたの書のみだりに見る事もちひずして、それ<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>用<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ベ</sup>き<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>を、節<sup>ハ</sup>よく<sup>一</sup>部<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>書<sup>ハ</sup>あ<sup>つ</sup>め<sup>た</sup>るといふ儀なるべし、此時ハ、用は財用<sup>ノ</sup>の儀にハあらざるべし、又、節<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>愛<sup>ス</sup>人<sup>ト</sup>とあれハ、此<sup>ノ</sup>書<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ベ</sup>き<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>ね</sup>く<sup>書</sup>あ<sup>つ</sup>めて<sup>テ</sup>愚蒙<sup>ノ</sup>の<sup>二</sup>た<sup>よ</sup>りと<sup>す</sup>れば、人<sup>ヲ</sup>を<sup>あ</sup>い<sup>は</sup>する<sup>ノ</sup>理<sup>ハ</sup>ある<sup>ゆ</sup>へ、此<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>節用集と名付たる歟

と説いている如く、「論語」学而篇の一節に基くものであると思われるが、その時々に応じて用いる意であるとする太田全齋「俚言集覽」等の説もあり、両方の意味が籠められていると考えることもできる。いずれにしてもその内容は、代表的な古版本を例にとると



彙の面で多少の工夫もなされ、見出し字に真(Ⅱ楷書)草の二体を出す二行節用集(二体節用、真草二行節用集)が慶長十六(一六一一)年以降出現し、さらに題号をはじめ収載語彙の若干について簡単な頭注を付した「頭書増補二行節用集」が寛文十(一六七〇)年、二行節用の行草体の見出し字の脇に併出してある真字体の漢字に対しても音又は訓を示す——つまり両方に音や訓が点ぜられているというところで「兩點」と称する——「増補頭書<sub>點</sub>二行節用集」が延宝九(一六八二)年に出る、といった具合に改良が試みられて行く。そしてまた、見出し語の分類・配列に際し、通行の節用集とは逆に、部門別けの意義分類の方をイロハ分けに優先させた「合類節用集」が、語彙の検索のし易さを狙ってか延宝八(一六八〇)年に刊行されるということもあった。その一連の工夫の中で特筆さるべきものは、宝曆二(一七五二)年以降、陸統と刊行されて行った「早引節用集」である。

早引節用。これは、節用集がイロハ分けと部門分けとを併用しているため、検索したい語がどの部門に属するものであるかを予め知っていないと、探し出すのに手間暇がかかるので、手早く引けるように、部門別けを取り払って、仮名数(音節数)によって引く方式にしたものである。そしてこれが一たび開版されるや、その方式を採るものが急速に広まり、江戸時代後半から明治にかけての節用集の主流を占めて行くことになるのである。(早引節用集についての詳細は「藝文研究」54号の拙稿「大全早引節用集 大全早字引」を参照されたい)。

ところで、その流れに立って、江戸時代後期に出版された節用集類をながめてみると、二つの傾向のあることがわかる。すなわち

- (イ) 「新撰早引節用集」(宝曆二(一七五二)年刊)や「増補早引節用集」(同七(一七五七)年再版)、「寶數引節用集」(天保十五(一八四四)年初刊)といった早引節用集類に多く見られるもので、簡素を旨とし小型化をめざすもの。

琴泊 <small>スゲスミカヲタテ</small> 菅原相城皇女英 <small>スゲノミヤノサトノミヤノヒメ</small> 金刺 <small>スゲノミヤノヒメ</small>	都 <small>大和國</small> 九 <small>鎌足大臣</small> 伏龍肝 <small>伏龍肝</small> 勝環 <small>勝環</small>	檀原都 <small>天呂</small> 十 <small>云云</small> 恰云彼 <small>恰云彼</small> 是 <small>是</small>	于 <small>干</small> 将莫耶 <small>将莫耶</small> 劍 <small>劍</small> 郷 <small>郷</small> 從 <small>從</small>	よ <small>一</small> 与代 <small>與代</small> 譽世 <small>譽世</small> 餘 <small>餘</small> 與余 <small>與余</small> 予 <small>予</small>
---	---	--	--	--

大全早引節用集・本文(部分)

(ロ)

「新撰都會節用百家通雅俗類」(寛政十三(一八〇  
字二兩點)

一〇年刊)や「大廣益」(天保二(一八三一)年初刊)、「江戸大節用海  
字二兩點)

内蔵」(文久三(一八六三)年補刻本等に代表  
字二兩點)

されるように、年代記や武鑑、小笠原流の躰方  
字二兩點)

等の付録を数多く付して、大型の百科辞典化を  
字二兩點)

図るもの。

の二つの方向である。いま前者はさて置くとして、後者  
 のうち「江戸大節用海内蔵」の付録を見ると、大本上下  
 二冊四百五十三丁のうち、上巻百八十二丁はすべて付録  
 で占められている。すなわち冒頭に大日本国略図・萬国  
 大概之図・横濱之図など、絵図が二十六種(うち十六種  
 は色刷り)ばかり載せられており、それらに続いて和漢  
 英雄競・大日本年代記・東都年中行事・大日本歳時故  
 實・大日本国郡並御大名付御紋・算術早学び等三十二種、  
 さらに下巻の頭書に往来物・和漢朗詠集等が十九種、下  
 巻末に男女相性五行相生相剋の事・名乗字等が十五種  
 というふうで、総計九十二種の付録が掲載されている

のである。もともと付録は前にあげた天正十八年本、饅頭屋本、易林本等の古本節用集にも、既に各々七、二、九種とついでいるのであるが、それが次第に量を増し、ついには本書のように全体の半分近くを付録で占めるものも登場するようになり、それに伴って元来日用的な辞典であつた節用集が、より一層実用百科的性格を帯びて行つたのである。「明治少年節用」がその緒言で、「元来げんらい節用せつようなる者は、西洋せいように所謂いはゆる『レキシコン』、若くは『エンサイクロペヂヤ』の類である」云々と言ひ、次に簡単に紹介する「傳家明治節用大全」が例言で「節用の書古今数十種、其間詳略精疎の別ありと雖も、皆な能く日常必需の事項を網羅し、之を坐右に備ふれば、大抵の事辨すべからざる無し」とし、また「節用の書は、普ねく宇宙間の森羅万象を網羅す」と述べているのは、まさにこの手合いの、実用百科としての節用のことなのである。

#### 四 明治二十三年節用集・傳家寶典明治節用大全

さて、節用集から一気に少年節用・少女節用に行く前に、考察すべき幾つかの書物がある。例えばそれは、少年・少女向けということから離れて言うと、明治生命が出した年度別の節用集であり、博文館の出した「傳家寶典明治節用大全」である。

まず年度別のものを紹介すると、管見に入つたそれは、明治二十三年と二十六年にかけての四冊分である。いま明治二十三年版を取り上げ掻い摘んで紹介すると、大きさは豎一八・一、横一二・四釐。前表紙中央に大きく「明治二十三年節用集」とあり、明治二十三年四月の刊。編輯兼発行者は東京市日本橋区南茅場町の明治生命保険會社俣野景藏、印刷人は國文社山本謙藏。非賣品、全五十六頁。内容は、明治廿三年曆曆、皇室・皇族に始まり

生命保険の起原、明治生命保険會社の経歴、有限掛金終身生命保険、妻子の爲め保険すへし、政府ハ生命保険を奨勵すへし、明治生命保険會社概況

等の生命保険關係の宣伝記事と

東京所在公廳、在本邦締盟外國公館、東京名勝花曆、東京著名學校、東京著名病院及醫師、東京著名旅館、郵便及電信條規摘要、東海道鐵道線路瀛車發着時間及賃金

等の日用便覽とが混在しており、宣伝と実用とを兼ねた配り物としての特色を備え、合わせて約五十種の情報を得ることが出来る。

また「傳家寶典明治節用大全」であるが、これは先年(昭49・6)初版本の復刻版も出たが、四六倍判(ⅡB5判)一冊で明治二十七年(一八九四)年四月の初版、定価二円。編纂者は博文館編輯局、発行者大橋新太郎。印刷所は東京築地活版製造所(明治三十六年十月の訂正九版は熊田活版所、同三十八年八月の十版は博文館印刷所)。以下初版本によって紹介すると、千二百頁十(奥付)四十(広告)百二十三十八頁。巻頭に皇居二重橋の写真や四季の景の色刷り木版画、大日本全図等を載せ、本文はタテ三段組。下段の本欄は

皇室一覽、古今名人列伝(勤王家の部、政事家之部古今發明家列傳 11部二五八名)、家事經濟編(近藤芳樹編 飲食門、衣服、家室、雜種門)、日本禮式、民間治療手当法并看病心得、農家心得草、肥料分析表、養蚕法、古今遊藝指南(茶之湯、玉突)、日用書簡文例

等二十三種、中欄は





未だしっかりとした近代的な百科事典が無かった当時において、たしかに本書の存在は通俗的、実用的なものであると言え、瞠目に値するものであった。いずれにせよ本書にしても、前に紹介した年度別のものにしても、そこで言う「節用」は、日用語の漢字表記を知るといった「節用集」本来の目的から離れて、諸種万般の知識を得るといった百科事彙・百科事典的な意味合いで使われているものであって、その点、少年節用、少女節用で言っている「節用」と相通する。その見方からすると、「明治少年節用」「明治少女節用」は、内容・体裁共々『傳家寶典 明治節用大全』の少年、少女向け版とも言えるのである。

## 五 開化 重寶生た節用集・通世界節用

ところで『傳家寶典 明治節用大全』より前に、新時代の節用、新時代の百科をめざして編集された「節用集」がある。それは明治十三（一八八〇）年刊の「『開化重寶生た節用集』と題する小冊子である。「生た節用」という書名は、寛政九（一七九七）九九）年頃に成った好色本「『今様和談色』（『好色変生男子』）巻四ノ一「密夫傳授之事」に登場する

攝州福嶋（ちやうしやうふくしま）といへる所に活田節用（かつたせつよう）といへる医者（いしや）有り、至極發明（しごくはつめい）なる人にて、何を尋（たづね）ても知らぬといふ事なし、勿論（もちろん）いかやうの六ヶ敷世話字（むつかけせわじ）・難字（なんじ）にても、早速相知候（さつそくあいにしれ）ゆへ、いろは分の字引（わけじびき）・くわく引（くわくびき）を見るに及（およ）ばず、此人（このひと）に尋候（たづね）へば微細（いみぎこ）にわかち候（たづね）ゆへ、活田節用（かつたせつよう）じやと人いへるニより、ある名ハ呼（よ）んで、活田（かつた）を苗字（ななづな）とし、節用（せつよう）を呼名（よな）となれり、

という「活田節用」を思わせるところがある。勿論同書の「活田節用」は今日言うところの「生き字引」的な意味あい  
で使われているのだが、本書の成立は、或は当時文部省から翻訳・刊行されつつあった「百科全書」や、同じく西洋



書の抄訳系統の重宝記「萬寶玉手箱」(安政五(一八五八)年)「萬寶新書」(万延元(一八六〇)年)その他の刺激もあつてのことかもしれない。内容は、雷の説、風の説、彗星の説、地球の説等十二項に分かれ

月中には兎が杵にて餅を搗ひて居るよふに見ゆるハ、これ一ツの世界にて、月愁は地球を距ること九万八千百一里にして、尤も近きものなり、その大きな地球の如し、望遠鏡にてこれを見る時ハ、大ひなる火山もあり、陸もあり、海もあり、又た樹木・岩石・家屋のよふなるものまでも見ゆると、近頃西洋にて未曾有の大砲を製り、その弾の中に三四人ものものを容れて打ち放ち、月の世界に至らしめんと工夫最中の由なりと……(初篇—5—月輪の説)

等といった説を各話に一つ宛挿し絵を入れながら開陳している。その所収内容からして、本書は通常の節用集で言えば乾坤門に当るものであるが、初篇で終ってしまったものらしい。なお書型の概要は次の如くである。

中本 活版一冊。外題 共紙表紙、朱刷り枠、水色菱模様地の上に「大日本加藤大先生著 定價拾錢／開化生た節用集／賣捌所 大坂綿喜」とあり。目録題「開化いき 重寶生た節用集初篇目録」、内題ナシ。尾題「開化生た節用集畢」。奥付 オモテは、右に「廣告」と題して「政府人民のわけ」「和印嬉し艸」等十八点の広告を載せ、左に「明治十三年六月八日出版

御座 定價十銭、ウラは「編輯兼出版人 同支店」とあり。全三十四頁。

「通世界節用」

また、「傳家寶典明治節用大全」の評判に便乗して出したような書物もある。例えば「通世界節用」がそれである。わら半紙刷、菊判一冊の本書は、明治三十二（一八九九）年九月十六日 東京 數理學館松岡寛次郎と文魁堂青野友三郎の刊。タテ二段組二十二行詰、全二百三十八頁。正價金貳拾五銭。末に「正誤」表一頁分を付す。編輯は數理學館編輯部。「例言」（明治卅二年九月 編者識）に

一 唐天竺を遠しとしたる時代には其時代相應の節用あり、今や日本は世界的の日本となりたるが故に、世界の大体に通曉すべき世界的の節用なかる可らず、

世界節用は即ち時世の進歩に伴ふて編せしものたり

一 博學強記を誇れる小數の物知り先生は暫く措き、多數の人は各執る所の業務あり、繁忙なる身を以て、古往今來に於ける世界の出來事を知り、世界の事物を明らめ、世界の知識を求めんとする、素より容易の業にあらず、此等の人々に向て良好なる顧問者となり、日常百事に便せんとするは、世界節用の目的なり  
 一 古來の事實は歴史、古記録、エンサイクロピ

女子高等師範學校教授 横山榮次君外九名補助 雜記新聞 中村千代松君編 (三版)

## 節用 日本家庭節用

▲第一編 衣服問答  
 ▲第二編 洗濯  
 ▲第三編 食物問答  
 ▲第四編 西洋料理  
 ▲第五編 衛生問答  
 ▲第六編 病氣問答

▲第七編 藥物看護  
 ▲第八編 傳染病  
 ▲第九編 肥滿  
 ▲第十編 西體質  
 ▲第十一編 滋養食物  
 ▲第十二編 婦人科  
 ▲第十三編 小兒科  
 ▲第十四編 痘症  
 ▲第十五編 消化器  
 ▲第十六編 呼吸器  
 ▲第十七編 外科救急  
 ▲第十八編 皮膚科  
 ▲第十九編 中毒  
 ▲第二十編 驅蟲  
 ▲第二十一編 花柳病  
 ▲第二十二編 生殖器病  
 ▲第二十三編 眼科  
 ▲第二十四編 雜病  
 ▲第二十五編 九雜病  
 ▲第二十六編 病院  
 ▲第二十七編 理科問答

▲第一編 家庭理科  
 ▲第二編 工藝理科  
 ▲第三編 家理理科  
 ▲第四編 工藝理科  
 ▲第五編 戶籍問答  
 ▲第六編 戶籍問答  
 ▲第七編 諸稅問答  
 ▲第八編 諸稅問答  
 ▲第九編 通信問答  
 ▲第十編 通信問答  
 ▲第十一編 農事問答  
 ▲第十二編 農事問答  
 ▲第十三編 牧畜  
 ▲第十四編 牧畜  
 ▲第十五編 家畜  
 ▲第十六編 養魚  
 ▲第十七編 養魚  
 ▲第十八編 教育問答

全一冊 洋裝クロス本  
 紙數千二百七拾餘頁  
 正價壹圓參拾錢  
 郵稅拾貳錢

發 博 元 文 館

デヤ等の諸書より拔萃せしものなれば、記す所皆憑證あり、但し一事物にして數説あるものは、彼此参照して尤も信に近きものを取れり

一 今來の事柄はアルマナツク、ユースフルインフォルメーション、ステーツマンスイヤーブック等を引用し、又新聞雜誌等より隨時に採録せしもあり、然れども活世界の現状は變遷常に極りなく、出版當時の新事實は出版後に於て最早陳腐に属するなきを保せず、此等は改版毎に訂正するを期す

一 従來地名、人名、名詞等に不穩なる譯語を附し、稱呼を誤り、意味を害ふを通弊なりとす、故に、此書には繁を厭はずして原語を附することとせり

等とあるが、図版に出した表紙ともども聊か大仰な感無きにしもあらずで、紀元、世界各國政体の區別、事物の起原、皇朝年代記、改正郵便條例摘要、世界の七大奇觀、華盛頓首府の白館、衆議院議員及撰挙者、世界四大教主の生死、俚諺(いろは別け)、相撲の沿革及四十八手、日本の海軍、秘傳妙法等、目錄によれば二百十五項の雑多な情報が収載されている。

實験  
問答 日本家庭節用

ちなみに博文館も「傳家寶典明治節用大全」の好評に氣をよくしてか、「問答日本家庭節用」という書を明治三十九(一九〇六)年一月一日に刊行している。三六判群青色クロス装の同書は、中村千代松の編。扉に「補助」として榎山榮次、吳久美子、關藤國助、今景彦、馬上孝太郎、瀬谷準造、片岡哲子、大里武八郎、佐藤得齋、河村精八の十名を掲げる。報知新聞の「かていごもん家庭顧問」に寄せられた読者の質問をもとに編集したもので、本文は衣服問答、食物問答、作法問答と農事問答、教育問答に至る十二篇に分け、計千三百六十七の問答を載せる。付録は日用書翰文例附電文例、歲時さいじと月名異稱ぐわつめいしやう、家庭萬重寶など六種を収録。全千二百九十七頁。巻頭の「とくしや讀者のこゝろ得」(明治三十八年十二月 編纂者識)で

本書は二様の目的を持って居ます、一つは「其れなり直ぐと實用たらしめること」、一つは「普通の人には實用なり難いが、其れを知て居ると萬事に理解のつくこと」、斯様なつて居るのです

と言っているように、生活に役立つ万般の知識を得られるようになって居る。検索に便利なように、目次が、大綱と細目次に分かれ、更に「目次いろは索引」と題する索引が付されているのは親切である。

## 六 萬寶童子節用大成・増補童子節用集

さて、右に見た如く、「傳家寶典明治節用大全」や明治生命版の年度別節用、それに「生た節用」や「通俗世界節用」等は、そもそもが児童向けに作られたものではない。それに対して江戸や明治初期のものであるが、「節用」を謳いつつ児童向けに編纂された書が何点かある。例えばここにあげる「萬寶童子節用大成」がそれである。

### 萬寶童子節用大成

中本一冊。題簽「應應二萬寶童子節用大成 完」。右に「合書往来」左に「用文章入」と小書。前見返し「文久再刻」／萬寶童子節用大成／堆文堂（印）。刊記 上に「十二月異名」（目錄）、下右に「十幹之図」「十二支之図」があり、左下スミに「文久元辛酉十一月改之」／金澤横安江町／近岡屋八郎右衛門／同 上堤町同出店」と記す。但し所載往来中、消息往来は内題に「明治消息往来」とあり、世話千字文は末に「明治十年五月御届」／金澤書林 櫻井保市壽梓、国尽しは「明治改正國尽」とある。それゆえ、本書の発売は明治期、それも明治十年五月以降である。丁数 前見返し十二〇八丁十奥付。

本書は巻頭の序文（加陽 探花房主人誌）に



萬寶童子節用大成・目録、口絵

夫文道之大也哉。人として学ばずんば不可有。譬者各家職之根元。五常之道。和漢之故吏。年中之舊傳に至る迄。ひととして文筆に達せずしてハ其理を明むる事なし。於是。今初学兒童を道びくに。普く専用たる諸書を集。常に机上左右に置いて必調。法之書なれば。萬寶童子節用大成と題号て世に弘むる事爾。

とあり、題簽にも「合書往来」と記すように、既存の幾つかの往来を合わせ編集したもので、今川制詞状、消息往来、実語教、童子教、商賣往来、小野篁歌字尽、兩點千字文等、江戸時代に盛行した代表的な往来物をまとめ一書としたものである。はじめに「總目録」があつて計六十八種の往来物や収載事項が載っているが、「未成刻」として、印が付いているものもあり、本文と参照すると、実際には約四十五種の事項、往来物が収められているということになる。中では「名物往来」（目録「北國名物往来」が、金澤版という特色を生かしており珍しいものと言えよう。但し、「金澤往来」、「萬國人物之画図」が目録にあつて本文に無く、「世界萬國往来」や「早引童子節用」等が未刻であるというのは残念な気がする。いずれにしても本書は諸種の往来の既存の単独版を寄せ集めて合冊にしただ

けという感があり、そのため、十千十二支は都合三ヶ所に出てくるし、「萬葉いろは」(今で言う変体平仮名集)も重出している等、若干の齟齬を来している。

さて、この「萬寶童子節用大成」は、明治十(一八七七)年頃の編刊本ではあるが、中身は全く旧来の江戸の往来物にしかすぎない。そもそも幾つかの往来物を輯めて一書にする形は、既に江戸時代前期からあり、版本としては慶安二(一六四九)年京西村傳兵衛版の「新板古状揃」を古いものとする。古状揃は、今川状、弁慶状、腰越状、大坂進状、手習状等十種余の古状をまとめ一書に仕立てあげたもので、時代が下るにつれて頭書や付録のかたちで国尽や偏冠構字尽、小野篁歌字尽、書初七夕詩歌等が加わり内容がふくらんで行く。一方、庭訓往来や消息往来、実語教童子教、商売往来といった代表的な往来物を何点かまとめて一書にし、「童訓往来新大成」とか「新童子往来百家通」、「合書童子訓」等と題した合書往来も、近世後期になって登場して来る。これは、童子寺子らが読むべき基本的な往来を一書に集め、それを読了・参看することによって基礎的な知識を会得することができるよう配慮したもので、童子のみならず大人達にとっても小百科的に利用できるものである。例えば「新童子往来萬寶大全」を代表にその内容等を紹介すると、次の通りである。

### 新童子往来萬寶大全

大本一冊。題簽「新童子往来萬寶大全」。全一六六丁(うち本文一六三丁)。刊記 後見返し匡郭内、上部に恵比寿・大黒が舞う正月風景、下方に「急用間合即座引」きゅうまにあいざすばひ「永曆大雜書天文大成」えいれきだいざしあふんたいせい「四體千字文國字引」の内容案内付広告があつて、界線を置いて左に「寛政四壬子年春正月吉日／大坂書肆 心齋橋南一丁目敦賀屋九兵衛版／心齋橋南四丁目吉文字屋市兵衛版／新町西土砂場海部屋勘兵衛版」と刊年・書肆を示す。内容は本文と頭書に分かれ、本文は



新童子往来萬實大全・菅公御詠画図

菅公御詠画図、新今川童子教訓條々、商賈往来、改正小韻  
 百五十番、庭訓往来、瀟湘八景詩歌

等十七種、頭書は

本朝三筆、ほんてうさんひつ 簞冠へんかぶりづくし、十幹十二支、破軍星くりやう、諸  
 禮圖抄、れいづせう 日本五山、にっぽんごさん 日本三景、今川壁書、腰越状、初登山  
 手習教訓書、御成敗式目、風月往来、大日本國盡、小野  
 篁歌字盡たかむらうたじつくし

第五十八種の科目を収録する。

以上見た如く「萬實童子節用大成」と「新童子往来萬實大  
 全」は童子向けの百科事象的な内容を有するものであったが、  
 他に似た内容で児童向けの「節用集」を名乗るものもある。

増補童子節用集

小本一冊。前見返し タテ三ツ割。右は鶏と桐の絵。中央に  
 太字で「日用重法一増補童子節用集」、左に「平安書舖 菊英館」。  
 内題「増補童子字盡」。日用重法 丁数 前見返し十九六丁十奥付。刊記  
 後見返し匣郭内。上部に終丁よりの「手のすじ吉凶見やうの



「圖」の続きがあり、下方右に「童字節用大成」「四民往来」等十点の広告。左に「安永五丙申年二月吉辰」筆作 淺田恒隆／平安書林 寺町通三条上ル町 菊屋安兵衛」とある。本書には大坂の小島屋伊兵衛の後印本もあるが、内容は、まず本文が

渾天儀圖、地球圖、小笠原諸礼之図式、目錄の書様、五穀并野菜字尽、百官名尽、増補童子字盡、京町盡、男女相性之事并歌

など私算によれば三十二種、頭書が

初学文章抄、手形證文書様、十二月異名、篇冠構字盡、矢数年代記、八筭掛割之術、金相場小割、願成就日、知死期操様、四季皇帝占

等二十四種、都合五十六種の情報(巻頭の目録には「都合五十四品」とある)を収める。その中心となっているのは「増補童子字盡」の部分で、イロハ順、每半葉六行、一行九字詰で(い)毎(日)外。如何。残去。否。(す)尖。都而。寸善尺魔。まで六十二丁分ある。またその前の方に「五穀并野菜字尽」「木之部」「草之部」「器財之部」「衣服之部」「魚



題 籤

鳥之部」「虫獸之部」「家名字尽」「禪門名尽」「尼名尽」等が並んでいるが、これは既に数種類刊行されていた「萬字尽」の流れを汲むものである。例えば「五穀并野菜字尽」は 稲、野稻、麦、小麦、蕎麦、粟、黍、笋、刈葱、渠芋、草石蠶、防風、菘蓰草 の百四語、「禪門名尽」は 道弥、久可、常圓、道春、淨智、恵久、尚貞、久信、良徳

の九十三名分の道号を収載する。すなわち本書は、イロハ分けの童子字尽と部門別の名集である萬字尽の両者を参看し、頭書その他を活用することによって相当量の語彙や事項を習得出来る仕組みになっているのである。

なお他に子供節用集と名乗る書物がある。例えば、先年高橋信裕氏から恵与された中本一冊、題簽に「嘉永一子供節用集」とある一本は、東都の山口屋藤兵衛を板元とし須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛ら十一名の書林が加わって刊行されているものであるが、これは内題に「日用重寶萬文字盡」とあって、実は文化三(一八〇六)年丙子六月に江戸通油町の

書林僊(仙)鶴堂鶴屋喜右衛門から板行された同書(中本、二卷二冊。題簽「分類早見字盡」)の外題変えである。内容は魚之部、貝之部、以下鳥・獸・虫・木・草花・青物・菓物・穀物・器財・衣類染色・居所・寺院・神社・藝能・諸職・食類・降物(雨・雪・霜・霰)・沫雪・暴雨・時候・山類・水邊・天象之部の二十三部に分けて語彙を収録し、頭書に名頭文字、国づくし、偏構冠字尽、百官名づくし、東百官、苗氏づくしの六種を載せるものである。

ところでこの「日用重寶萬文字盡」はまた、他の書物に、「子供節用字」と題して転載されている例がある。例えば嘉永三(一八五〇)年秋八月刊の「小野篁歌字盡大全」と万延元(一八六〇)年版の「早引節用集」の頭書である。両者とも東都の文江堂吉田屋文三郎版。前者の題簽や前見返しでは副題に「頭書子供節用集」と謳っており、付録は他に「月の異名」のみ。本体の歌字盡ともども子供を対象に編集発兌されていることが明白である。

## 七 一字 千金 現今 兒童 節用・幼童 節用 無盡 藏

さて、以上、江戸時代に於ける合書往来や節用が童子向けの百科事彙的内容を有していることを、任意に取り上げて見て来たわけであるが、「萬寶童子節用大成」が既にそうであったように、明治に入ってもこの傾向はまだまだ続く。

次にあげる「千字現今児童節用」や「児童節用無盡藏」がその例である。

千字現今児童節用

袖珍本 色刷り絵入りボール表紙、洋装、銅版一冊。外題「舊邦堂伴源平編輯／千字現今児童節用／浪華 藜光堂藏」。刊記終丁才に「頭書畫入講釋眞行千字文」等四点の広告。ウに「明治十六年十二月六日版權免許／同年十二月廿五日刺成發兌定價二十錢／編輯人 大阪府平民伴源平／東區瓦町二丁目四十一番地／出版人 同 平民此村彦助／東區備後町四丁目卅七番地」とあり、次いで「大阪 児島伊兵衛／同 松村九兵衛／同 沢田幸助」以下三十九名の「賣捌書林」を細字で三段に列記する。全四十二丁。本書は、巻頭の「巻中目次」「大日本能書三筆像」「同能書三蹟像」「文字の起原」「菅公之御歌並小傳」までの二丁分が色刷り、以下

勸善教訓以呂波歌、永字八法之圖、苗字盡、漢言解、千字文、新商賣往來、扁冠、旁構、字盡、除汰八筭之圖、諸禮之大概、色紙短冊之書法、祝言小謡

等五十種(目録には「以上五十一種」とあるが、目録にある「日之称呼」は本文中に無い)を収載するが、大半は旧来のもので、明治期の新しさが出ているものは、「漢言解」(イロハ順に二字熟字を収録。怡悦コブ、樞要ノシの百十七語)、「新商賣往來」「羅馬數字表」「筆算數字表」「はがき用文年始状」程度である。

幼童節用無盡藏

石田才治郎編輯  
袖珍本 銅版和装一冊。題簽 紅刷り。「幼童節用無盡藏 全」。前見返し紅刷り。「石田才治郎編輯／幼童節用無盡藏 鮮富永濯画」

全／明治十七年五月。刊記 終丁才。「明治十七年三月十三日 出版々権御願／同年三月廿九日 版權免許／同年四月三十日 刺成發兌」



幼児節用無盡蔵 前見返し・目録

創成発売 定價二拾錢／編輯人 京都府平民 石田才次郎／下京区第拾二組元懸王子町十  
 一番戸／出版人 京都府平民 内藤彦一／下京区第十三組大壽町十九番戸／發賣人 京都府平民 田中治兵  
 衛／下京区第五組大文字町十八番戸。終丁ウは「諸國弘通書林」として「東  
 京日本橋通二丁目稲田佐兵エ」に「全(京都)寺町松原上ル今井七郎兵エ」の四十四  
 名の書肆を掲げる。色刷り、全五十六丁。  
 この「幼童節用無盡蔵」は、体裁・内容とも、明らかに「千字現  
 今兒童節用」を意識している。すなわち本書は「菅原道實公之小  
 傳」に「十千 十二支」までの四十種を収載するが、うち三十二種ま  
 だが「現今兒童節用」に一致し、「商賣往來」「世話千字文」「書翰旧  
 新時候」も彼の「新商賣往來」「千字文」「時候」と各々対応するも  
 のであるから、殆どが重なり合うと見てよい。但し本書は「年中用  
 字いろは字引」と題する「(い)遣・委・畏・依」に始まり「(す八)  
 寸善尺魔・數万部摺立」に終る八行九字詰の両点早引節用の部  
 分が一才し四十六ウの下段、すなわち全体の半分近くを占め、その  
 点、前に見た「増補童子節用集」に於ける「増補童子字盡」を思わ  
 せるものがある。  
 それにしても、「幼童節用無盡蔵」の前見返し書の書名部分の意匠

が、図版に見る如く、掛け札もしくは乗ふうになっているのは、少年節用・少女節用の本文第一頁の内題部分がそうであることを思い合わせると、両者の関係を象徴しているように思える。勿論このような意匠は他にもあるから、直接的な関与を云々するわけにはいかないが、いずれにしても、「明治少年節用」「明治少女節用」は、如上の童子往来、童子節用の流れを汲むものであり、近くは「傳家寶典明治節用大全」の少年少女版と言えるものなのである。

## 八 少年百科事彙・大正少年節用

さて、少年、少女節用を出した前後に、博文館と小波達は、何点かの児童向け学習小百科を編集・刊行している。影響作・追随作も合わせ、次に紹介して行くこととする。まず最初に掲げるのは「少年百科事彙」である。四六判クロス装一冊の本書は、扉が少年節用と同じく紺地に白ヌキ。右上に「巖谷小波校閲／竹貫直人／木村小舟／合編」とあり、中央に大きく「少年百科事彙 全」、左下方に「東京 博文館蔵版」と記す。明治四十年四月十五日印刷、同四月十八日発行であるが、国会図書館に献納された本では、発行の四月の「四」と十八日の「十八」を、各々墨で消し「五」「二」と訂正し、各々その上に「大橋」の小判型朱印を捺す。奥付は右方に印刷、発行年月日を二行に分けて記し、中央上方に「少年百科事彙」「著作権所有」「定價金壹圓六拾錢」と各々右横書き、下方に「編者 木村小舟／竹貫直人／發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎／印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎」と出し、その下に「東京秀英」と右横書き。左に「發兌元 東京市日本橋區本町 博文館」と記す。はじめに四季の花、交通機関等石版色刷り四葉と、植物・武器・日用品等の石版白黒図版九葉。次いで「明治四十年四月編者識」という次のような「緒言」三頁分がある。

生等 不肖を顧みず、先に明治少年節用の編纂を試みた所、意外にも江湖少年諸君の大歓迎を得て、版を重ねる事、



次いで五十音の「頭字索引」一頁と、五十音引きの「少年百科事彙索引」九十五頁分。本文は、はじめに「少年百科事彙」巖谷小波監修／竹貫直人  
木村小舟「合編」と内題があつて、ア行の部・ア アイヌノワ行の部 ヲ ヤヤママチまでの七百七頁分。タテ二段組。一段二十行、二十三字。末に「格言三則」一頁分と奥付。奥付のウラから「明治少年節用」第五版等の広告七頁分あり。後出の「大正少年節用」付載の広告(図版参照)に

天下の学生諸君は只だ此の一卷を備へて机邊に繙かば、恰かも囊中の物を探るが如く便利此上もなき寶典なりとす、殊に本書は國定教科書の教材に重きを置きて編輯したれば、学生諸君は勿論、小学校教員及父兄の参考書としても亦不可無の好寶典也。

と宣伝しているように、たしかに本書は五十音順に項目を配列し、索引も備つて検索し易くなつており、説明内容も少年節用に比し詳しくなり旧來の節用離れをしている。が、それでも

少年世界編輯局編

# 大正少年節用

東京 博文館藏版

アカホン〔赤本〕 小説本的一種、貞享の頃草双紙出版の始め、丹色の表紙をかけ、一面に表題を記し、別に畫など描かず、之を赤本と呼ぶ、其作者には觀水堂丈阿なる者あり。  
アクシユ〔握手〕 男女手を握りて約束する事、歐米の禮式とす、我國にては上代よりの風俗にして、既に神武紀に見ゆれど、後世此事絶えたり。

等という今日から見れば不確かな記述も混在している。なお、書名

は或いは富山房の「日本家庭百科事彙」(明治三十九年)を意識しているかと思われる。

### 大正少年節用

三六判 紺色クロス装一冊。扉 白地に朱刷梓、文字は黒緑色。「少年世界編輯局編／大正少年節用／東京 博文館蔵版」。内題「大正少年節用」。奥付「大正三年十二月五日印刷／大正三年十二月八日發行／編者 少年世界編輯部／發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地大橋新太郎／印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地高橋季吉／印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地博文館印刷所／發兌元 東京市日本橋區本町三丁目博文館」。中央上部に「大正少年節用／著作權所有／定價金壹圓」と右横書。

本書は前に出た「明治少年節用」の大正版と言うべきもので、内容・体裁とも前者に似る。但し「緒言」(大正三年十一月 編者識 緑色刷)に

我邦最近の文運は、明治廿七八年戦役に於てその第一期を劃し、同三十七八年戦役に於て第二期に入り、更に今回の歐洲大戦によつて、第三期を劃すに至つた。即ち今次の大戦は、戦後に於ける世界地圖上の變化は更にも云はず、物質上に齎らす影響も甚大なるには相違ないが、その思想上に及ぼす變化は絶大なるものがあるであらうと思ふ。

編者が此大正少年節用に執筆しつゝある時、恰かも世界は今次の大戦に入つた。此革新の時代に當つて、最も新しい知識を有する少年少女に薦めらるべき此書は、単に各自の學科として修むべき原理や定義を聯ぬるばかりでは、物足らぬ感じがする。學科の定義や、事物の原理やは、これを學校若くは家庭の教育に仰ぎ、これが補習參考として、最新の學說を努めて網羅し、平易に之を説明して、大正の少年節用たる名に背かざらん事を期した。これを嚮きに出版した「明治少年節用」と比較したら、霄壤の差があらうと考へる。

かうした考案の下に成つた本書が、或は曩の「明治少年節用」に比して、聊か抽象的に流れたやうな觀もあるだら



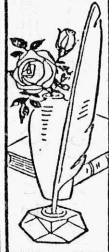
うが、定義や原理やを教科に譲つて、寧ろさうした新しい學說に準據したと云ふ事が、補習參考の上に、いかに大なる効果を諸君の上に齎らすであらう、況や本文に挿入せる圖畫及び寫眞版は、辭句を補ふに餘りあるものであらうと思ふ。

と言つてゐるように、明治少年節用に比べ精度は増してゐる。例えば比較する意味で天文篇「星」を出せば

星とは何ぞや 天晴れて雲なき一夜、仰いで天際を見れば金平糖の如き形したるもの輝き、見渡す限り一面に、金梨地を見るに等しく、人は之を呼びて星と云ふ。あゝ星、星とは如何なるものか、吾等は先づ之に就いての知識を得なければならぬ。天文學上にては、月の如き太陽の如き、或は吾々の住所たる地球をも矢張り星と稱する。さてこれ等の星に就て、仔細に観測せば、各星夫れ々一定の位置を取り、東から西に向つて運行するものと、他の星に對する位置の常に變じつゝ、運行するものとの別あることを見るに違ひない、即ち前者は之を恒星と呼び、自體より發光し、後者は之を遊星と稱し、恒星の光を受けて漸く輝くものである、されば彼の太陽は恒星の一方で、地球は正しく遊星の一つである。



# 大正少年節用



和漢文選

和文之部

源氏物語

須磨の巻  
須磨にはいとあつくしの  
秋風ぞ、櫻丘にこぼれど

本科

植物

(一) 電氣栽培 最近農藝界の呼物となつて居るのは電氣栽培法である。その秘訣は、から廿七八年前、フィンランドのレームストロムと云ふ物理學者が、極光を研究する目的を以て北極地方へ旅行した時、極地の植物が意外に繁茂し

和漢文選

和漢文選

一

とあつて、大仰な書き様ながら説明は詳しくなつてゐる。はじめに「歴史時代風俗」等の石版色刷り四葉、次いで「英姿颯爽」(東宮殿下御肖像)、「日本三偉人」(伊藤博文・東郷平八郎・乃木希典)、「日本海陸軍の活動」等の写真十二葉。緒言、勅語、天皇御歴代、合わせて八頁と続き、二十頁分の

目次があつて本文に入る。本文は明治少年節用と同じく本科と別科に分かれ、計五百八十頁分。本科は発明篇、天文篇、地文篇、以下歴史、地理、博物、数学、理化(目次「理科」、文藝、工業、商業、農藝、軍事、修身篇の十四篇。別科は不思議世界、日本戦争譚、郊外散歩の栞、博物叢談、欧州大戦の原因等十二項、鼈頭は和漢文選、格言集(五十音順)、少年歴史こよみ、常識と雑話等十三種。そのうち5「新福引材料」(五十音順)のハの部では「博文館」に対し(泰園子)日本一)、ミの部では「三田の学校」に対し(大版の野紙)けいおう(慶應)、6「考へ物」(イロハ順)の「と」の部では「大正少年節用は實に(徳川の臣二人)」という問に対し明治少年節用の場合と同じように「伊井、本多」と答える等の遊びを混えている。また、奥付ウから七頁に互る広告では「少年百科事彙」「明治少女節用」の各五版等が宣伝されている。

## 九 少年百科寶鑑・二十世紀少年節用

ところで「少年節用」「少女節用」の売れゆき好調を見てか、「両書の追隨作も登場して来る。「少年百科寶鑑」、「二十世紀少年節用」等がそれである。

### 少年百科寶鑑

三六版一冊。内題「少年百科寶鑑／濱野知三郎著」。奥付「明治四十二年一月二十日印刷／明治四十二年一月二十日發行 定價金壹圓／著作者 濱野知三郎／發行兼印刷者 東京西大久保 山本完藏／發行者 大阪備後町 岡田菊二郎／關東發賣元 東京本石町 至誠堂書店／關西發賣元 大阪備後町 吉岡寶文館」。なお、後出の「二十世紀少年節用」巻末の広告には發行元として岡田文祥堂書店のみを出している(七三頁図版参照)。はしがき(明治四十二年一月五日 東京西大久保の

僑居に於て 著者しるす。巻頭に総目次十八頁分。本文は全七百四十六頁。修身科、国語科、英語科までの二十五科に分かれる。頭書は祝日大祭日の解、處世の礎、事物起原など三十種。

二十世紀少年新節用

小三六判一冊。堅一五・一、横九種。濃紅色クロス装に白緑色でマーガレットの裾模様。背文字金、表紙書名は白。

扉 濃紺刷り、「教育講究會編纂」二十少年新節用／大阪二書房藏版。内題「二十少年新節用／教育講究會編纂」。奥付「明治四十三年一月二十日印刷／明治四十三年一月廿五日發行 定價金五拾錢／編纂者 教育講究會／發行兼印刷者 山本

完藏／東京府豊多摩郡大久保村大字西大／發行者 岡田菊二郎／大阪府東區備後町五丁目八番屋敷／關東發賣元 振替口座東京一七四四番 至誠堂書

店／關西發賣元 大阪府東區備後町四丁目 寶文館書店。すなわち、前出の「少年百科寶鑑」と同じ發行者、発売元。巻末に「ポク

論語註釋」等、山本文友堂と岡田文祥堂の二書店の刊行物の広告が各々ある。

本書はその「はしがき」(いぬのとし正月 著者の一人しるす)で

「はしがき」(いぬのとし正月 著者の一人しるす)で

孫三郎 卓賜 下覽

樞密院副議長長伯爵 東久世通閣下閣字 東宮侍講文學博士 濱野知三郎先生著

# 少年百科寶鑑

正價壹圓 特價二圓部銀八拾錢 小包料拾貳錢

形方長六四 冊一全

發行元 (振替口座大阪三三八番) 岡田文祥堂書店

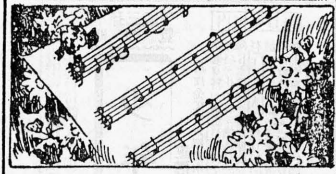
行發堂詳文

まだ小學校の門に通う居られる少年諸君のためにと思つて、何よりも先づ、目を楽しましめる繪畫を本位として、兎も角この一冊をこしらえあげました。修身から始めて、國語、算術、理科、地理、歴史と、總てを成るべく小學校の教科に準據て、その範圍から外れないようにと、現在、教育の道にたづさわつて居られる人にも、疑わしいところを問合せ、随分の苦心を重ねたこともないでありません。

著者わ凡て六人、しかし、文章の調子、それが離れぐぐに

二十少年新節用

教育講究會編纂



朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり我か臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我か國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及

◎修身

れるつもりで、著者わ夫れ「苦心しました」と言っているように、挿し絵・挿図が多く、やさしく説こうとしているのが特色でもある。例えば理科の7と8を示すと

◎ドウすれば鶏卵が水に浮く乎

全體、鶏卵の水の中で浮くものでないが、水中に鹽を入れて其中に入れるとブクツと浮上るものである。この秘密を能く心得て後、諸君わ多くの人の居る座敷で、これから隠し藝を一つ御覧に入れますと云つて、やつて御覧、必ず拍手喝采を受けるでしよう。

◎ドウすれば火箸で硝子が切れる乎

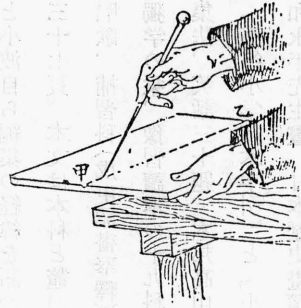
これも隠し藝の一つで御座います、先づ一枚の硝子を用意する、さてその硝子を假に二つに切ろうとするには左の圖の通り、甲から乙に一つの線を引き、やすりを以て甲の處を少し傷つけ、さて赤く焼けきつたる火箸を以て、静

なつてわ、讀む人も讀み憎くかうと、一人で筆を取ることにしました。

假名づかい、それも今わ、まだ確固に定つて居ませんから、總てをお伽噺の大家巖谷小波氏が近頃使つて居られる假名遣に従いました、まだ年のいかない人達にわ、その方が讀み易いと思ひましたから。

云々と言つて居るように、仮名遣表記からして既に小波流に拠つて居るわけで、内容も推して知るべしである。

但しまた同じ「はしがき」で、「どのページにも繪畫を入



かに甲の傷から乙に至る線の通りに線を引くと、それで思い通り二つに切れま  
る、三つに切り、四つに切るも、皆同じ方法にすれば宜しいのです。

の如くである。本文は修身、国語、算術、理科、地理、歴史の六教科、頭書は童話(尻尾  
と頭)鼠の相談(九話)、ワシントンの五徳、手紙の認め方、九九の聲、記憶帳(物體の  
速度)動物の寿命、邦本地理摘要等二十二種で、計四百十三頁。別に巻頭に石版色刷りの  
軍旗、軍人、稲の刈り入れ等の口絵三葉、はしがき二頁、目次十四頁、巻末広告十六頁  
分。広告中には濱野知三郎の「少年百科寶鑑」を含む。なお本書には明治四十三年二月

十五日の再版(二刷)本もある。

## 十 新撰日本少年寶鑑・新日本少女寶典

さて小波は、「明治少年節用」「明治少女節用」以後、博文館ではなく別の出版社から同じような企画のものを刊行し  
ている。「新撰日本少年寶鑑」と「新日本少女寶典」である。仔細に見ればそれなりの差異はあるが、両者とも各々「明治  
少年節用」「明治少女節用」に類似し、また少年寶鑑の方は、書名や口絵等、浜野知三郎のそれや「二十世紀少年新節  
用」に倣っているところがある。

新撰日本少年寶鑑

小三六判一冊。「二十世紀少年新節用」と略同じ大きさである。扉白地に朱刷り枠。紫色の行草体で「新撰日本少年寶  
鑑」と記す。内題「本文第一頁上部に「新撰日本少年寶鑑」と右横書き。奥付「明治四十四年三月卅一日印刷／明治

四十四年四月三日發行(国会図書館本による。同本では「卅一」と四月三日の「四」と「三」の部分に青ゴム印を捺した紙片が貼付されている) 正價金壹圓也／編者 巖谷小波／發行者 東京市神田區錦町二丁目三番地岸野英一／印刷者 東京市京橋區

南小田原町二丁目九番地中野鉄太郎／(下に「印刷所 東洋印刷株式會社」と右横書き)發兌元 東京市神田區錦町二丁目三番地 文王閣／

發賣所 東京市神田區錦町二丁目角 勉強堂書店。はじめに朱刷りの「凡例」(明治四十四年学年末 編者識)があり

此の書は現代少年の自修用に供せんがために、主として中小學生に適切なる科目を選び、最も平易簡明に記述したものである。本科は小學生のため、補習科は中學入學準備者、及び實業補習學校生徒の、參考たらしめんとての用意である、又鼈頭の材料は、一般家庭團欒の資料に充つるのが、編者の希望である。

されば本科には、なるべく挿畫を豊富にし、補習科に於ては、必ずしも多くの畫を入れなかつたのである。又本編の記述は主として木村小舟氏の手になり、只算術科は竹貫佳水氏、英語科は長井青郊氏の筆勞を俟つた。而して其編纂の仕組みに就ては、編者の大に苦心をした點も少くはないのである。

と小波自ら編集の経緯を語っている。巻頭に戦争や脱穀の図等色刷り口絵四葉、凡例二頁。目次は鶯綠色刷り上下二段三十七頁。本文は本科と鼈頭に分かれ全八百五頁。本科は修身科、歴史科以下、地理、作文、理科、算術、圖畫、遊戲唱歌、補習科(戊申詔書奉釋)、式日及記念日、實業手引(農業部)、工業、商業、英語、法制一班、軍事一班、救急療法、獨学の栞、豫習讀本の十九科、鼈頭の部は童話三十題(犬と影と藪醫の蛙)、東西少年逸話(森蘭丸ノ北條時宗)、昆蟲採集法、笑話三十題、本邦高山一覽、謎々三十題、福引五十題、學校新聞材料、少年俳句、考物五十題等四十一種。中に「高等小学讀本字引」と「小学唱歌集」(舟遊かぞへ歌 四十八曲)を含むのは新趣向。末に「上田萬年先生解説、名和永年先生畫 日本歴史畫譚(増補四版)」等の広告三頁分。

新最 日本少女寶典

三六判一冊。紺地クロス装、金で百合の花を捺す。背文字金、小口は赤紅染。扉 白地に行草体、黒文字で「巖谷小波

共編／新最日本少女寶典／東京 誠文館蔵版」とあり。奥付 明治四十五年三月二十日印刷／明治四十五年三月廿五日發

行 定價金壹圓五拾錢／著者 巖谷季雄／沼田藤次／發行者 田沼秀夫 東京市神田區南栗物町七番地／印刷者 飯田三千太郎東

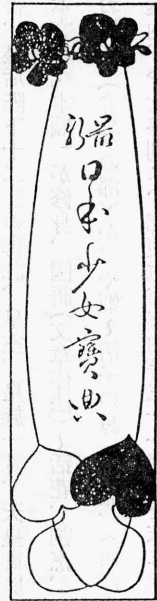
京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地／發行所 東京市神田區南栗物町七番地 振替貯金口座東京第六九九番 誠文館／下に「印刷所 株式會社秀英舎第一工場 東京市牛込區市谷加賀町

一丁目十二番地」と右横書き／関西發賣元 大阪市東區備後町四丁目 吉岡寶文館 神戸市元町通五丁目 吉岡寶文館支店。巻頭の「緒

言」(明治四十五年桃の月 編者識)に

本書は現行小学校令及び高等女学校令に基き、教科書以外の参考用、または自修用として、少女に必須な学藝、な  
らびに日常の心得を平易簡明に記したものであります。(中略)本書の編述については、「少女フラワー」の著者小  
野小峽君の執筆を煩はしたことが多いためであります。

云々と、その編纂目的と執筆者について記してある。石版色刷りの口絵(婦人風俗、髪型)四葉、皇太子妃殿下、東京女  
子高等師範附属高等女学校等の写真四頁に続き、少女節用と同じく権威づけを図ってか、序が二つ(一は「明治四十五  
年春霞立ちそむるころ 三輪田眞佐子」、一は「明治四十五年二月 下田次郎しるす」)七頁分、次いで緒言、勅語、詔  
書、皇后陛下十二徳の御詠、皇室、皇族一覽、天皇御歴代、計二十頁分と続いて行く。次に目次が二段十四頁分あり、  
本文は「本欄」が修身、国語(文章作法)と活花、割烹、家事経済等三十一門六百三十六頁。「上欄」が少女美談、少女  
お伽噺(日本の部)かぐや姫と清子の鼻 八話、(西洋の部)踊り靴と白ばらと少女 七話、少女遊学案内、女子職業  
案内、少女夢判じ、郵便電信案内等三十一種。巻末には小波の「少女對話選」、笠峰の「少女十二物語」、小野小峽「お伽  
物語」



少女美談

(日本)の三

▲毛利元次の女  
毛利元次の女は、七才の時、母に死に別れました。

少女美談

修身

一 健全なる精神 身體の健康をはかるのに、適當なる食物と運動との必要なことは、殊さらに言ふまでもありません。而して健康なる身體には、健全なる精神を培はせなければならぬことも、また皆様がよく御承知のこと

修身

等が内容案内つきで推奨されている。なお、蘆花の「不如歸」に続き紅葉の「金色夜叉」もあげられているが、「この小説も前の『不如歸』と同じやうに、学校卒業後に讀む方が、わかりやすくもあるし、興味も深からうと思ひます」と但し書きがある。

以上、「明治少年節用」「明治少女節用」にはじまって「新日本少年寶鑑」「新日本少女寶典」に至る児童向けの啓蒙書類を、その周辺を含め見て来たわけであるが、最初に記したようにこれらがすべてではない。江戸期の節用や合書往來、大雑書につらなるような書物はまだ他にもある。例えば節用を名告るものも、総合百科的な内容を盛り込んだもの他に、「二六節用」、「挿繪節用」(昭16)、「挿花草木節用」(昭27)といった、特定の分野に関するものもある。それらについても云々すべきであろうが、既に紙数も大幅に超過してしまった。ひとまず筆を擱くこととする。

少女フラワー」等の広告十二頁分がある。

内容は「明治少女節用」に似るが、教訓を説く調子が、沼田笠峰・小野小峽流というわけか、柔かく懇切丁寧な感じがある。上欄の9「讀書の栞」にあげられている書物も、前者とちがって教訓・修養書一辺倒ではなく、「小波お伽百話」「お伽七草」「少女對話選」(以上小波)、「少女スケッチ」「少女百話」「少女十二物語」(以上笠峰)の他、若松賤子の「小公子」「忘れがたみ」「一葉全集」